

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 14 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20520164

研究課題名 (和文) 後期上方読本の成立における実録の影響についての研究

研究課題名 (英文) Study of the effect of *jitsuroku* upon the origination of *the latter Kamigata-yomihon*

研究代表者

田中 則雄 (TANAKA Norio)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：00252891

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近世文学

1. 研究計画の概要

後期読本史の全体像を把握するためには、文化5、6年(1808、09)頃の、江戸読本の隆盛とそれによる江戸・上方読本間の作風の融合以前に位置する、享和～文化初年(1800～05年頃)の上方読本の実態の解明が不可欠である。これに該当する作の多くは、実録を種本としており、その影響関係を明らかにする必要がある。既に従来の研究(2005～07年度・基盤研究(C))に基づき、京都の作者・速水春暁齋の読本に独自の記述体が存すること、それを踏襲する方法が、栗杖亭鬼卵など、文化期後半以降の作者の読本にも見出されるとの結論を予測し得ているので、このことを、各作者各作品に即して検証しようとする。

2. 研究の進捗状況

上方作者・速水春暁齋の〈絵本もの〉読本に始まる記述体(構成の型)が、この後上方読本が江戸読本と融合を始める文化5、6年(1808、09)頃以降も、実録依拠の読本において踏襲されていることを解明した。

そして文政期(1818～)に入ってから、上方作者たちは実録依拠の読本の制作を続ける(好華堂野亭、文亭箕山など)。更には、江戸作者が上方へ入って来て、上方作者と交流しながら、実録依拠の読本を執筆しており、そこにも春暁齋以来継承された要素が存することをも把握した。

一方で、典拠の側に位置する実録の様式の解明も行い、幾つかの実作品を分析対象として、実録特有の記述のあり方とは何であるかを把握し、論文著書を通じて公表した。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

2に述べた研究成果に基づく、後期上方読本の論、上方・江戸読本比較の論、実録の様式把握の論を、論文・著書を通じて公表した。

4. 今後の研究の推進方策

今後は、文政期(1818～)の読本で、実録に依拠するものを中心に、そこに存する様式を探究する。

文政期の実録依拠読本を主たる対象に、春暁齋以来の流れがどこに行き着いたのかという点を追究し、実録依拠の読本の成立と、その後の展開について、全体像を把握し、本研究のまとめとする。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

①田中則雄, 松江藩と実録, アジア遊学, 135号, pp.142-151, 2011, 査読無

②田中則雄, 水滸伝と白話小説家たち, アジア遊学, 131号, pp.132-141, 2010, 査読無

③田中則雄, 実録『三巴八雲の敵討』について, 山陰研究, 2号, pp.19-32, 2009, 査読有

④田中則雄, 浄瑠璃の読本化に見る江戸風・上方風, 江戸文学, 40号, pp.92-105, 2009, 査読無

⑤田中則雄, 松江藩士妻敵討事件の小説化について, 『日本のことばと文学—日本と中国の日本文化研究の接点—』, pp.294-308, 2009, 査読有

[図書] (計1件)

①田中則雄, 雲陽秘事記と松江藩の人々, 松江市教育委員会刊, 2011, 全90ページ, 査読無